

留学報告書

アリゾナ大学植物科学科
種田 修三

今年の夏、研究のためパナマで植物サンプリング（採集）を行った。前回の報告書でもワニやスペイン語が云々と書いたが、幸運にも生きたワニには遭遇せず（死んだワニの腕は見たけれども）、スペイン語もあまり必要にならなかった。とは言え、熱帯雨林でのサンプリングは驚きの連続であったので、今回はそれについて書こうと思う。

我々のサンプリング旅行は主に植物や苔、藻を採集することが目的である。こう書くと簡単そうに聞こえるだろう。侮ることなかれ。私は侮っていた。植物採集が困難なものだと微塵も思っていなかった。実際、初日に先生がサンプリングの方法を実演してくれて、小一時間ですんなりと終わることができた。私も予想通りの方法であったので、なるほど簡単だと思った。しかし、今思えばその場所は開けていた。周りにはほとんど木や葉がない登山道の入り口だった。先生は実演するために非常に簡単な場所を選んでくれていたのだ。

もう少しサンプリングについて書こう。我々の研究は自然環境にある植物の葉の中にどのようなエンドファイト（前報告書参照）がどれだけいるのかを調査するのが目的だ。そのためサンプリングでは、できるだけ人の手が加えられていない場所から葉や苔を取らなければならない。たとえ国立公園内であっても近くに道があるとだめなのだ。文字通り、人の道から外れなければいけないというわけだ。熱帯雨林で一步脇に出るといことは、緑の壁に向かっていくようなもので、一步踏み出すごとに植物の葉や蔦が顔や体にひっきりなしに向かってくる。想像してほしい、眼前に広がる圧倒的な植物達を（写真1）。分け入っても分け入っても熱帯雨林。それを掻き分け踏み分け、サンプリングを行うのだ。さらに、掻き分けた先に何がいるかわからない恐怖。ダニやノミはもちろん、蛇まで出てくる可能性がある。そして奴らが出てくるのは地面からだけではない。樹上に生活していることもある。これが熱帯雨林に入っていくという恐怖である。愚かな私がこの事実に気づいたのは採集2日目であった。熱帯雨林を道沿いに幾らか進み、先生は言う。「このあたりで採集しようか、修三。じゃあ昨日教えたみたいに採集してね。」目の前には真緑の景色が広がっていた（写真1）。私は脚色なしで本当に立ち尽くして、口を開いた。「・・・先生、ここですか？」先生曰く、「Yes, of course! (ニヤニヤ)」私、「ここ行くんですか？」先生、「Sure! (笑)」もう腹をくくるしかないと思った。こうして戸惑いながら始まったサンプリングであったが、結局はサンプリング中に蛇に遭遇することはなく、毒のありそうな虫に刺されることもなかった。そして今ではどんな植物達が目の前に立ちほだかろうとも私は分け入っていく自信がある。この自信がいつか役に立つと信じたい。

他方で、サンプリングの嬉しい誤算もあった。採集する藻類は熱帯雨林だけでなく水中にもある。つまり、我々は海に潜り海藻も採集した。この採集方法もかなりワールドで、採集地点に到着したら各々船から海に飛び込むだけだ（写真2）。これをカリ

ブ海と太平洋の両方で楽しんだ。サンゴ礁や色とりどりの魚達だけでなく、イルカまで間近に見ることができた。

この他にも、仮設した研究室で朝6時半から夜半までぶっ通しで働くなど、パナマ旅行は予想をはるかに超えてタフであった。しかし、それ以上に楽しく素晴らしい経験をさせてもらった。これもアリゾナ大学へ来たご褒美か。さらに来年の3月には、同様のサンプリング旅行として南米チリを訪れることが決まった。教授はパナマでの私の働きぶりを認めてくれ、修三にはぜひ同行してほしいと言ってくれた。森を掻き分ける力が評価されたのだろうと考えておく。以前の予定ではパナマ旅行が私の大学院生活最初で最後のサンプリングだったため、同行の依頼は予想外であったが、必要とされるのは非常に嬉しい。二つ返事で引き受けた。次のサンプリングもかなりタフになるらしいが、なんにせよ、安全第一で帰ってこられたらと願うばかりである。



写真1：パナマの熱帯雨林



写真2：シュノーケリング風景